［音　楽］

生徒が意欲をもって取り組む旋律創作の題材の工夫

－年間二題材の設定の試み－

佐藤　則子*

1　はじめに

2008年の中央教育審議会答申で「歌唱の活動に偏る傾向があり，表現の他の分野と鑑賞の学習が十分でない状況が見受けられる。特に創作と鑑賞の充実が求められている。」と指摘を受けたように，これまでの中学校音楽における創作の学習は，十分な取組がなされていなかったことは否めない。それは，中学校音楽の授業時数が35～45時間と少ない上に，校内合唱コンクールといった行事との関わりから歌唱の授業に時間を費やさざるをえない状況があり，創作の学習はおざなりになりがちであったからである。学校によっては小学校からの積み上げが十分とは言えない面があり，歌唱や器楽の領域と比較しても，創作の学習は取り組みづらいという一面があった。中でも旋律創作は，つくる活動への指導・支援よりも，出来上がった作品を五線譜に書き起こす指導に労力を費やさねばならないという実態があり，そのために，旋律創作の学習は生徒にとって達成感の得にくい活動であり，教師にとっても本来の目的の達成が難しい活動となっていた。したがって生徒は，充実感もなければ，「分かった」「できた」も感じられず，音楽的な力も身に付かないという悪循環をもたらしていたのである。この状況を打開するため，少ない時間数を有効に使って指導ができ，生徒が意欲をもって取り組める題材を開発する必要があると考えた。

自分の思いを音で創作・表現し，自分なりの作品をつくり出し，充実感や達成感を得，「分かった」「できた」という喜びを得ることが，学習に対する関心・意欲を高め，さらに活用・探究へとステップアップすることにつながる。そこでの「分かった」「できた」という実感が創作活動の楽しさの一端であり，その体験の積み重ねが生涯にわたって音楽に親しんでいく態度を育てる基盤の１つになると考える。

そこで，本実践では，短い日本語のフレーズを用い，その言葉からリズムや抑揚を導くことで，旋律創作の学習に生徒が意欲を高め，創作での充実感や達成感，「分かった」「できた」を実感し，そのことが音楽の学習全般に関心・意欲を高めていくであろうと考えた。

2　研究の目的

中学校第２学年の創作の活動において，能力差の様々な生徒が，意欲的に取り組むための題材構成はどうあればよいのか，どうすれば生徒が抵抗なく活動を進めていけるのかについて，実践における生徒の姿とワークシートへの記述や出来上がった作品を通して生徒の意欲の変容を明らかにし，題材の構成や年間指導計画への位置付けについて考察する。

3　研究の内容と方法

(1)　内容

次の２つの題材を１学期と３学期それぞれに配置し，その間に設定する歌唱等の活動が３学期の創作活動をより充実したものにすることを期待して，年間指導計画を構成した。

①　題材１：言葉のもつリズムを生かした旋律創作の活動「カノンをつくろう」（１学期）

カノン（輪唱）は，生徒が保育園や幼稚園，小学校で歌った経験のある活動で，短い詩と旋律を抵抗なく歌い重ね合わせることで和音の響きが創出される。このことに着目し，旋律の最初のフレーズに付けられた和音の構成音から音を選んで次のフレーズの旋律をつくることで，表現の技能が高くない生徒にとっても旋律創作が可能になると考えた。

＊ 上越市立板倉中学校

② 題材２：言葉の抑揚を生かした創作の活動「作曲家になってみよう～短歌の作品をモチーフにして～」（３学期）

生徒に歌詞として与える短いまとまりのある日本語のフレーズは，短歌が適切であると考えた。また，生徒にとって分かりやすい日常的な言葉で書かれた短歌であれば，詠み込まれた作者の思いや背景を具体的にイメージすることも容易である。さらに生徒の生活に近い作品を取り上げることで，より具体的なイメージがもてるであろうと考え，俵万智著「サラダ記念日」を取り上げた。情景や作者の思いを想起しやすい短い詩であることから，表現の技能が低い生徒でも取り組みやすく，表現の技能が高い生徒には発展的な学習が期待できると考えた。

⑵ 方法

実践を通しての活動への関心・意欲の変容を把握するために，関心・意欲を三段階に分けて，それに適合する３名の生徒を抽出した。対象とした３名について，以下に説明をする。

A子：授業への関心・意欲や表現の技能に優れている。吹奏楽部に所属している。自分の考えをもって活動に参加したり表現の工夫をしたりすることができる。

B男：授業への関心・意欲も表現の技能も中程度。おとなしいが話はしっかり聞くことができる。地域のグループで太鼓を習っており，リズムに対する感覚に優れている。

C男：真面目に活動に取り組みたい気持ちはあるが，技能が低いために，表現したいことが形にできないまま活動を終えることが多い。

4 授業の実際

⑴ 「カノンをつくろう」の実践から

① 題材の指導計画（全４時間）

時	学習の流れ	主な学習活動	教師の言葉かけ
第１次 １時間	○カノンとは？	・「カノン」という曲の形式について知る。	・「かえるのうた」って，どんな形の曲かな。
	○詩を決めよう。	・ワークシートに示された詩の中から１つ選ぶ。	・作りやすそうなのはどれだろう。
第２次 ３時間	○言葉のもつリズムに音符を付けてみよう。	・手を打って確認しながら，言葉のもつリズムを音符で書き表す。	・詩を声に出しながら，手拍子をしてみよう。
	○使う和音を決めよう。	・参考作品を見て，フレーズの和音を考え，和音進行をどのようにするか決める。	
	○使う音を決めよう。	・決めた和音の中から，どの音をどんな順番で使うか，決める。	・参考作品はどんな順番で音を使っているかな。 ・和音は無理して全部使わなくてもいいよ。 ・同じ詩の人はどうしているかな。
	○楽譜にしてみよう。	・楽譜に書き起こす。 ・リコーダーを使って演奏をし，出来上がった楽譜を確認する。	・終わる感じはどんな音かな。 ・小節に収めるには，何拍子にすればいいかな。 ・リコーダーで吹いてみよう。

② 指導の実際

題材の導入では，「カノン」の形式を説明するために，「かえるのうた」や「一年中の歌」（図１）を歌わせた。そこで，最初のパートが歌い出した後，１フレーズ遅れて次のパートが歌い出すことによって和音の響きが生まれること，使われている和音の種類が限られていること，和音の構成音から旋律ができていること等を確認した。最初は「『カノン』ってなんだろう。難しそうだな。」という思いで説明を聞いていた生徒も，「かえるのうた」というなじみの深い楽曲がそれに当たると分かり，少し不安から解放される様子が見られた。

創作の活動に入るに当たっては，定められた手順に沿って活動が円滑に進むよう配慮し，図１のワークシートを用いた。図１の資料Ａにあるように，曲に用いる詩は資料Ａの３つの詩から選んでよいこととした。資料Ａの１は，１学年で使用した教科書にある輪唱の詩を活用した。資料Ａの２・３は，１年時にリズム創作で使用した「ラーメン」「サイ

ダー」などの言葉を所々に入れて，抵抗感が少なくなるよう配慮した。

また，詩の長さや拍節感の異なるものを提示し，能力に応じて工夫への意欲をもつことができるようにした。自分で詩を書きたい生徒のために自作の詩を用いることも認めた。

また，図１の資料Ｂでは，和音の使い方や和音進行の参考例として３曲を提示し，最終的な形を示した。また，同じ詩を選んだ生徒同士の座席をまとめて配置し，技能が低位の生徒が仲間にも教師にも恥ずかしがらずに質問できるようにした。そのため，相互の発表の場を設けなくても作品を見せ合ったり仲間に意見を求めたりする姿が見られた。

初めて旋律創作の活動に取り組む生徒ではあったが，多くの生徒は提示した活動に興味を抱き，仲間と活動についての情報交換をしながら，意欲的に活動を進める姿が見られた。しかし，技能が低い生徒ほど，活動に抵抗を示し，詩を選ぶことも一苦労であった。難しくない詩はどれかと尋ねてくる生徒には，短いものや見慣れた言葉が入っているものを勧め，一緒に手を打ってリズムを確認しながら詩を決定させた。

図２のワークシートでは，まず言葉からリズムを導き，そのリズムに和音構成音から選択した音を付ける，というように，段階的に旋律を構築していくことで，それぞれの活動がつながっていくように配慮した。関心・意欲の高い生徒は，ワークシートを使いながら，教師に頼ることなく自主的に活動を進めていった。一斉指導をした後は，技能が中～低位の生徒を中心に，和音の使い方やリズムの書き方について個別指導を行った。

ある生徒は使う和音は決めたものの，和音構成音をどのような順番で使えばよいか迷っていた。そこで図１の資料Ｂを確認し，実際にピアノで音を弾いて音の順番を確認した。そのやりとりを見聞きしていたＣ男は，それでも分からないときはどうすればいいのかと声をかけてきたので，同じ資料Ｂを示して，「山火事」という作品のように，使う和音を１つで通してしまう方法もあると伝えた。

Ａ子をはじめとする意欲も技能も高い生徒のグループは，言葉にリズムを付ける段階で，詩によって拍節感の違いがあることに気付いたり，小節の中でも和音を変化させようと工夫したりする様子が見られた。

自分で楽譜を書くという経験がほとんどない生徒にとって，最終段階で楽譜に書き起こす作業は多くの時間をかけなければならなかったが，ワークシートに設定した五線譜に，見よう見まねで音符を書く姿が見られた。音符の長さや１小節に入る音符の数，音符の書き方について個々の生徒に即して指導を行い，作品が楽譜として仕上がるよう支援した。うまく楽譜が書けないと訴えながらも自分のワークシートを見せ，出来具合を評価してもらおうとする生徒もおり，頑張ったことや良くできたことを賞賛した。

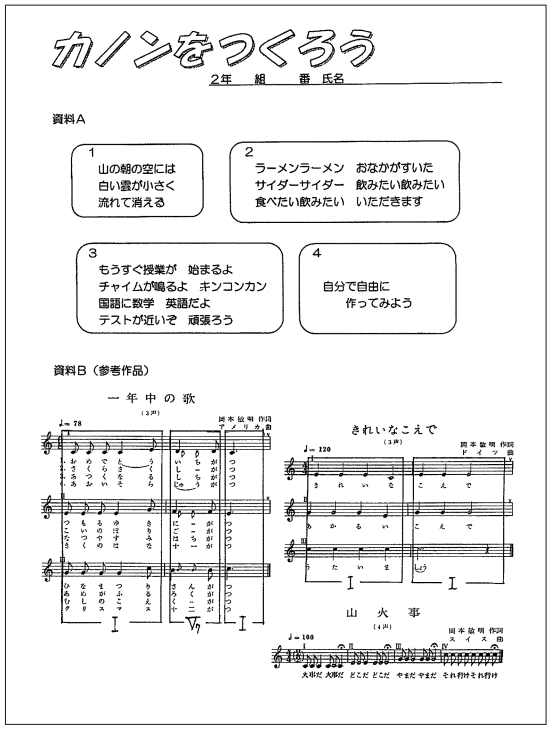

図１　ワークシート１

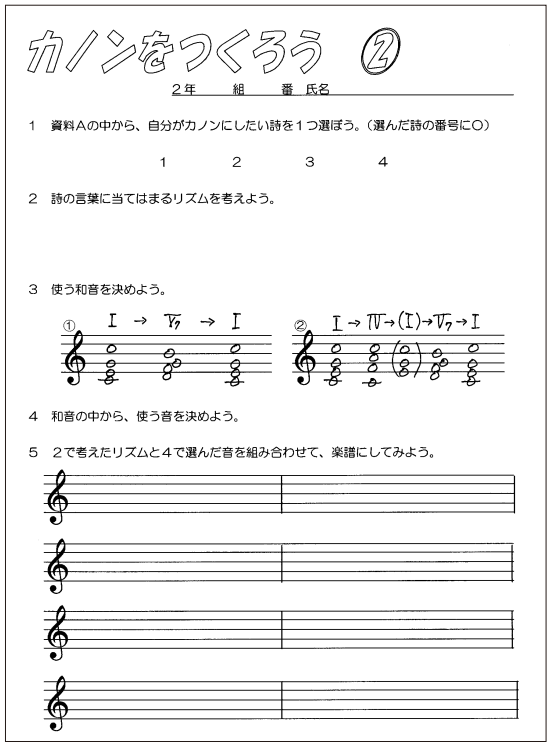

図２　ワークシート２

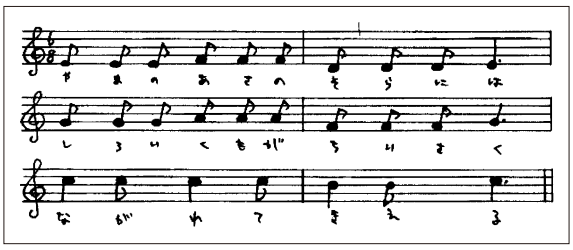

図３　Ａ子の作品

③　学習後の感想から

A子：最後に，実際にリコーダーで演奏してみて，「自分でも和音が付けられるんだ」と思った。難しかったけど楽しかった。（図３）

B男：めずらしくスムーズにやれた。自分でリズムとか音とか決めるのは，結構楽しかった。（図４・５）

C男：最初はどうして良いか迷ったけど，だんだん分かるようになった。とても楽しくできた。（図６）

その他の生徒

・最初は難しいかなと思ったけど，そんなに難しくなかった。でも，音を付けるのがうまくいかなかったと思った。作曲する人ってすごいな，と思った。

・班の友達と協力してできたので良かった。自分なりに良い曲になったので，達成感が感じられた。

・ちょっと分かってきて，楽しかった。曲が自分でもつくれるなんて思っていなかったので，びっくりした。

・どうやって作って良いか分からなかったけど，先生が説明してくれて，カノンを楽しめた。

・楽譜を作るのが難しかった。

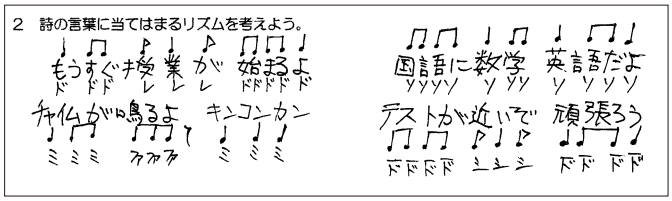

図４　B男の創作メモ

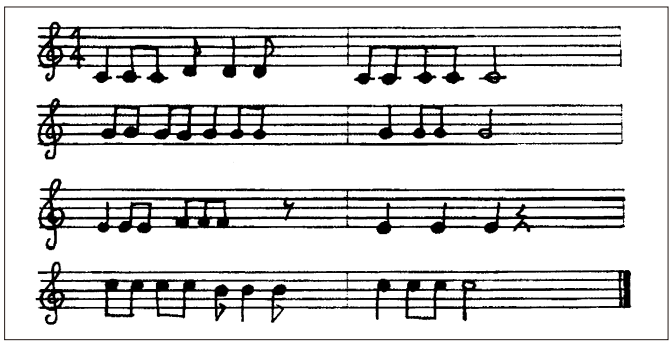

図５　B男の作品

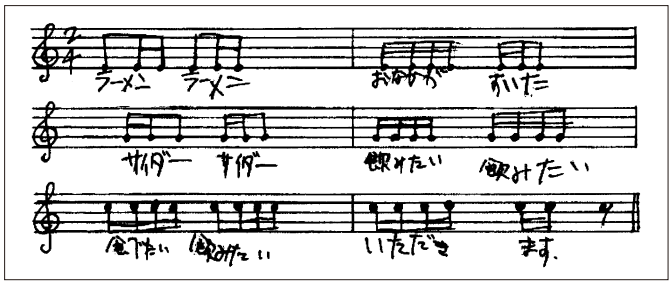

図６　C男の作品

(2)　「作曲家になろう　～短歌の作品をモチーフにして～」の実践から

①　題材の指導計画（全５時間）

時	学習の流れ	主な学習活動	教師の言葉かけ
第１次 １時間	○イメージをもとう。 ○言葉と音をつなげてみよう。①	・現代短歌の作品に触れ，短歌の背景を想像して，自分なりのイメージをもつ。 ・言葉の抑揚を考え，図式化してみよう。	・それぞれの短歌は，どんな場面が描かれているのかな。 ・ゆっくり発音して，抑揚を確認しよう。
第２次 ３時間	○言葉と音をつなげてみよう。②	・鍵盤楽器を使って，言葉の抑揚を生かした音を探そう。 ・リズムを付けてみよう。 ・曲の形式を整えて，まとめよう。	・図を基に，言葉の抑揚を生かした音を当てはめてみよう。 ・言葉のリズムを，音符にしてみよう。
第３次 １時間	○短歌を歌おう。	・出来上がった歌を発表してみよう。	

②　指導の実際と生徒の活動の様子

平易な言葉で書かれた短歌であれば，詠み込まれた情景や作者の思いを想像することが容易である。また，短歌は少ない文字数で構成されている詩であることから，短時間で言葉の抑揚を音程に反映でき，生徒自身の思いが出来上がった旋律にも反映されやすいと考えた。そこで，生徒が共感しやすくかつ具体的なイメージをもてるよう，題材には俵万智著「サラダ記念日」の中から，生徒が身近に感じられる出来事を題材にした作品を取り上げた。

ア　言葉の抑揚の図式化

生徒に，自分が選んだ一首を全て平仮名に直させ，言葉の抑揚を折れ線グラフのような図に書き表させた。（図７）言

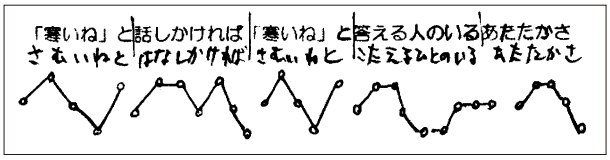

図７　言葉の抑揚を図式化した様子

葉の抑揚が旋律線を導き出す際の方向性を示すヒントになると考えた。生徒は一文字一文字を声に出し，指やシャープペンシルで図をなぞりながら，抑揚を確認していた。

イ　使用する楽器

言葉を音にする活動では，歌詞を口ずさみながら探り弾きのできる電子オルガンを用いた。中には言葉の抑揚が音の高低と結び付かずうまく図式化できない生徒もいたが，図式化にこだわらず，言葉を声に出しながらオルガンで探り弾きをさせることで，言葉と音を結び付けられるよう支援した。

ウ　リズムの記譜

言葉に即した音程を決定した後，言葉のもつリズムを音符に書き表す活動を行った。（図８）この活動は「カノンをつくろう」の学習でも行っていたので，比較的スムーズに進めることができた。リズム譜を書きながら，拍子はどうしようか，音符の長さをどのようにすればうまく小節に収まるか，といったことを考える生徒もいた。ただ，低位の生徒にとっては容易な活動ではなく，教師と一緒に手を打ちながらリズムを確認したり，音符の組み合わせを考えたりした。

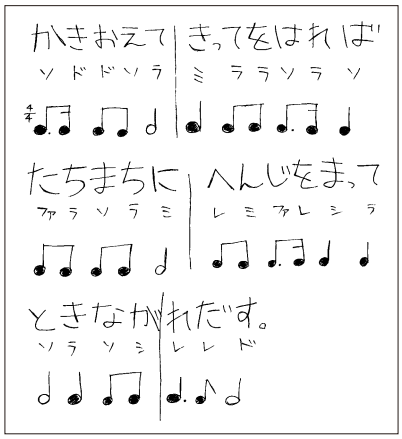

図８　言葉に階名とリズムを書き込んだメモ

具体的な詩のイメージをもって言葉に音を付け始めると，様々な工夫が見られるようになった。「『寒いね』と話しかければ『寒いね』と答える人のいるあたたかさ」では，同じ短歌を選んだ生徒の間で，会話しているのは同性か異性か，同性同士でも男子同士なのか女子同士なのかによって，独自の旋律をつくる様子が見られた。「書き終えて切手を貼ればたちまちに返事を待って時流れ出す」では，書き終えたうれしさと返事を待つドキドキ感をはずんだリズムで表現しようとしたり，言葉の区切れと拍節感を結び付けようと休符の入れ方や音の長さを工夫したりする生徒がいた。

エ　清書への支援

リズム譜が書き上がると，それを音高とともに五線譜に書き起こす活動を入れたいと考えた。しかし「カノンをつくろう」の題材では，この活動が思うようにできず，時間内に終わらない生徒が多く出たので，この題材では生徒が書き上げたメモを基に教師が楽譜に整理した。自分の思いで意図した旋律が教師の清書で実現した楽譜をうれしそうに眺める生徒の姿が見られた。

③　学習後の感想から

A子：「作曲」というと，すごく難しいイメージがあったけど，やってみたら楽しかったです。言葉の（音の）上がり下がりや，その短歌全体の感じに合わせて，音やリズムを付けるように考えました。詩と音は別々のものではなくて，１つにつながっているのだと思いました。

B男：作曲することがけっこう楽しいことだと分かったので，またやりたい。

C男：最初は何をすればいいのか分からなかったけど，やっていくうちに，音符の数の数え方や楽譜のことなどが分かり，（作品が）できてとってもおもしろかった。

その他の生徒

・作曲することはすごく難しかったけど，思った以上にとても楽しかった。またやってみたいと思ったし，今度から音楽を聴くときに，意識が変わると思う。
・難しかった。作曲家はどうやって作曲しているのか知りたかった。
・１つの音を決めてみると「ほかの音もいいなぁ」と思い，ついつい変えてしまって，音が決まりませんでした。でもとっても楽しかったです。
・一度音を付けてみても，曲になった感じがあんまりないな，と思った。だけど自分の付けた音にリズムを付けていくと，少し曲らしくなってきて，楽しかった。

5　考察

(1)　「カノンをつくろう」の実践から

旋律を付ける詩を生徒が自分で決定したこと，難易度の異なる詩を用意したこと，幾つかの参考作品を提示したこと，

和音進行を複数例提示したことなどにより，生徒が「自分の作品である」ことの意識をもって活動に取り組み，技能の高い生徒にも低い生徒にも意欲付けができたと考える。C男のような低位の生徒も，座席の配置を工夫したことで，仲間の助言を得て途中で投げ出すことなく自分のペースで活動に取り組むことができた。A子は自分の選んだ詩が，なじみのある４分の４拍子では小節にうまく収まらないことに気付き，教師の拍子についての助言をヒントに，既習の「浜辺の歌」の８分の６拍子に決め，作品づくりを進めていた。

「カノン」のように分かりやすい形式の中で小さなステップで活動を進めることが，旋律創作の活動に初めて取り組む生徒にとって，自分の学習活動の方向を確認しながら作品づくりを行えるという点で，有効であったといえる。

⑵　「作曲家になろう　～短歌の作品をモチーフにして～」の実践から

日常的に使っている平易な言葉で書かれた短歌は，描かれた場面や作者の思いをイメージしやすく，創作の活動を進める意欲を高めるために，大きな役割を果たしていたと考える。表現の工夫への意欲が高いA子は，言葉の抑揚やリズムと短歌に詠み込まれた思いに着目して，旋律を付けようとした。リズム感に優れているB男は，言葉のもつリズムを旋律に生かすよう心がけながら，つくる活動に没頭する姿を見せた。

電子オルガンの使用は，扱いが容易で音域も広く，自分の出した音がすぐに確認できるので，特に低位の生徒にとっては有効な学習用具であった。

「カノンをつくろう」の活動では楽譜に書き起こす作業に時間をかけなければならなかったが，それを教師が支援して清書を行ったことで，きれいに整った楽譜が生徒の充実感や達成感を増幅させたと思われる。

６　成果と課題

今回取り組んだ２つの題材は，生徒の音楽経験や生活体験を踏まえた共感しやすい題材を選んだこと，ワークシートが学習活動の流れを見通せるようになっていること，そしてこの中で小ステップでの学習活動を仕組んだことが，生徒の意欲的な学習を導いた。ワークシートに学習活動の流れが提示されていて活動の全体像が見通せ，能力差に関わらず創意工夫できる活動の幅をもたせたことにより，生徒は最後まで投げ出すことなく活動に取り組むことができた。そして「難しかったけどまたやってみたい」という感想が多く見られたのは，作品を五線に書いて仕上げることよりも創意工夫してつくり上げる場面を重視したことにより，「分かった」「できた」を実感し，達成感や充実感を感じることができたからだと考える。

年間35時間とされている少ない授業時数の中で２つの題材に計９時間を費やした。二つの題材をそれぞれ１学期と３学期に配置したことにより，その間の２学期の学習や年度末の卒業記念合唱の学習活動にも良い影響を及ぼした。２学期の合唱活動では，発音や言葉のニュアンス，和音の響き方を意識した歌い方をする姿が見られたが，これは１学期の「カノンをつくろう」の学習を踏まえた言葉の抑揚や言葉のもつリズムへの着目と，和音の構成音から旋律をつくる学習が影響したと考えられる。また３学期の卒業記念合唱では，歌詞から読み取れる思いや描かれている場面を感じ取り，ダイナミクスや調性の特徴を生かして歌おうとする姿が見られた。これは「作曲家になってみよう」の学習を踏まえ，楽曲のダイナミクスや調性が作詞者の思いとつながっているということに気付いた結果と推測される。これが他の学習との関連付けができた姿ととらえると，一度で終わらせることなく継続して活動に取り組むことで，生徒の学びの広がりや深まり，意欲の高まりにつながっていったといえる。

限られた授業時数の中で，創作の学習に年間９時間を費やすことは，現状では難しい面がある。しかし，これらの実践による生徒の好ましい変容を見逃すことはできない。更に効率よく生徒の学びを高めたり深めたりさせていくために，創作の題材を改善していくことが，今後の課題である。また，作品を記録しておく方法として今回は五線譜を用いたが，五線譜にこだわらない記録の方法についても，ＡＶ機器の活用も含め，検討の余地があると考える。

〈引用・参考文献〉

・高須　一　「特集Ⅱ学習指導の創造と展開　音楽づくりを中心とした題材計画の作成－〔共通事項〕を生かして－」初等教育資料（2009）pp.44-46
・原田　徹　「中学校新学習指導要領の展開　音楽科編」　明治図書，2009年
・文部科学省「中学校学習指導要領」
・文部科学省「中学校指導要領解説　音楽編」